

ヒコバエ（再生稲）でイネ縞葉枯病発病株率の 高いほ場が見られます

県西地域ならびにその周辺市町では、翌年の防除にむけて、
畦畔雑草等の管理や育苗箱施薬等の準備をしましょう

[現在の発生状況]

- ① 平成 25 年 10 月～11 月にかけて、県内のヒコバエ（再生稲、以下ヒコバエと記載）におけるイネ縞葉枯病の発病状況を調査した結果、県西地域を中心に発病株率の高いほ場が見られる（表 1, 2, 写真 1）。

表 1 県内のヒコバエにおける
イネ縞葉枯病発病株率

調査地域	発病株率 (平均) (%)
県北	2.0
県央	2.4
鹿行	1.8
県南	2.5
県西	26.1

※1 圃場あたり 300 株を見取り調査



写真 1 ヒコバエにおけるイネ縞葉
枯病多発圃場

表 2 県西地域のヒコバエにおけるイネ縞葉枯病発病株率

調査地点	発病株率が最も 高かった圃場 (%)	参考	
		調査圃場数	平均発病株率 (%)
筑西市	二木成	11	42.4
	野殿	8	46.3
	久地楽	5	18.3
桜川市	海老ヶ島	5	4.0
	真壁町白井	5	9.9
	長方	2	12.8
下妻市	西小埜	5	1.5
	大宝	4	60.2
	中郷	5	49.1
結城市	高道祖	5	11.1
	小田林	3	58.7
	宮崎	5	39.3
	江川大町	3	36.0
	武井	5	30.4
八千代町	新宿新田	5	13.2
常総市	高崎	3	36.8
坂東市	本豊田	5	1.3
	上出島	5	2.3
	平八新田	5	1.5
境町	稲尾	4	40.4
	桐ヶ作	3	14.9
古河市	水海	5	33.3
	柳橋	5	31.5
	東山田	5	21.9
五霞町	山玉山	5	18.7
	江川	4	33.6

※1 圃場あたり 300 株を見取り調査

[防除対策等]

- ① イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカは、秋季にヒコバエ等で成育し、畦畔や土手等周辺のイネ科雑草で越冬する。このため発病したヒコバエが多いと保毒虫が多くなり、翌年の本田で多発生する可能性が高い。特に前年のヒコバエの発病株率が50%以上発生したほ場があった地域では、翌年の水稻で減収が大きくなる恐れがあるので十分に注意する。
- ② 畦畔等の雑草を枯らし、ヒメトビウンカの越冬場所を減らすようにする。
- ③ 田植え時にヒメトビウンカ防除を目的とした育苗箱施薬や、本田の薬剤散布は防除効果が高いため（図1）、翌年の防除に向け薬剤の準備を行う。なお、育苗箱施薬剤については表3を参照する。

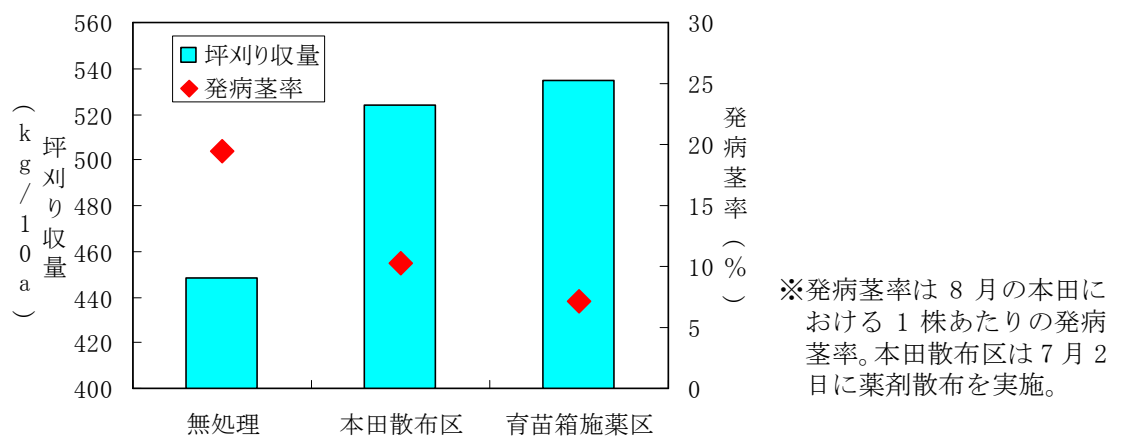


図1 5/17移植コシヒカリにおけるヒメトビウンカ防除と本田におけるイネ縞葉枯病の発病状況及び収量の関係（平成25年茨城県農業総合センター農業研究所調べ）

表3 イネのヒメトビウンカに使用できる主な育苗箱施薬剤（平成25年11月6日現在）

	薬剤名	殺虫剤の成分名
殺虫剤	アドマイヤーCR箱粒剤	イミダクロプリド
	ダントツ箱粒剤	クロチアニジン
※殺虫殺菌剤	スタウトダントツ箱粒剤08	クロチアニジン
	ブイゲットスタークル粒剤	ジノテフラン
	ロングリーチ箱粒剤	
	デジタルコロトップアクタラ箱粒剤	チアメキサム
	フルサポート箱粒剤	イミダクロプリド+スピノサド

※殺虫殺菌剤は殺虫剤のみの成分名を記載した。

●農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を必ず確認のうえ使用する。